

『平家物語』扇的群読台本【語り手】【与一】

群読台本【語り手】

③ろは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、をりふし北風激しくて、磯打つ
はっきり 大きく 次につなげる感じ

波も高かりけり。 一息で読む
大きく

いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。
 平家軍と源氏軍のどちらも見て

〔全体的なポイント〕

- 戦場という緊迫した場面
- 激しい北風が吹く身のひきしまる場面
- 命懸けの与一
- ◎ 呼吸が楽なようにシートを片手で持つ
- ◎ 背筋を伸ばして声を張る（腹から声を出す）
- ※ ブツ切れにならないようにうねりを持たせて
- ※ 両軍の声を引き出すように
- ※ 戦場、厳しい自然状況を想像し、その中に自分を入れる
- ※ 武士らしい身振りをイメージして

群読台本【与一】

与一目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、
重く、静かに、ゆっくりと

願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、
強調（盛り上げ）

弓切り折り自害して、人に二度面を向かふべからず。いま一度本国へ迎へんと
静かに

おぼしめさば、この矢はづきせたまふな。」
強調（盛り上げ）

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、
強く

〔読み方の工夫〕

- 神仏のいる場所を具体的に定めてそこに声をあてる
- 地の文からすでに祈り始める
- 会話の中の大事な表現を盛り上げるように読む
- 「あの扇」「この矢」それぞれの場所に目を当てて読む
- 祈る姿勢をイメージして心の中で動作する